



ちひろのことば

大人になること

人はよく若かったときのことを、とくに女の人は娘ざかりの美しかったころのことを何にもましていい時代であったように語ります。けれど私は自分をふりかえてみて、娘時代がよかったとはどうしても思えないのです。といってもなにも私が特別不幸な娘時代を送っていたというわけではありません。

戦争時代のことは別として、私は一見、しあわせそうな普通の暮らしをしていました。好きな絵を習ったり、音楽をたのしんだり、スポーツをやったりしてよく遊んでいました。けれど生活をささえている両親の苦労はさほどわからず、なんでも簡単に考え、簡単に処理し、人に失礼をしても気付かず、なにごとにも付和雷同をしていました。思えばなさげなくもあさはかな若き日々でありました。ですからいくら私の好きなももいろの洋服が似あったとしても、リボンのきれいなボンネットの帽子をかわいくかぶれたとしても、そんなころには私もどりたくはないのです。ましてあのころの、あんな下手な絵しか描けない自分に戻ってしまったとしたら、これはまさに

自殺ものです。

もちろんいまの私もうりっぱになってしまっているといっているわけではありません。ただあのころよりはましになっていると思っています。そのまだましになったというようになるまで、私は20年以上も地味な苦労をしたのです。失敗をかさね、冷汗をかいて、少しずつ、少しずつものがわかりかけてきているのです。なんでも昔にもどれましょう。

少年老いや早く学成りがたしとか。老いても学は成らないのかもしれない。でも自分のやりかけた仕事を一歩ずつたゆみなく進んでいくのが、不思議なことだけれどこの世の生き甲斐なのです。若

かったころ、たのしく遊んでいながら、ふと空しさが風のように心をよぎっていくことがありました。親からちゃんと愛されているのに、親たちの小さな欠点が見えてゆるせなかったこともありました。いま私はちょうど逆の立場になって、私の若いときによく似た欠点だらけの息子を愛し、めんどうな夫がたいせつで、半身不随の病気の母にできるだけのことをしたいのです。これはきっと私が自分の力でこの世をわたっていく大人になったせいだと思うのです。大人というものはどんなに苦労が多くても、自分の方から人を愛していきける人間になることなんだと思います。
〔「ひろば」至光社 1972年4月号より〕